

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	上杉 奈央子 【比較社会文化学専攻 平成21年度生】	要 旨
論文題目	エドモンド・ガーニーの音楽論における形式と表現内容について	<p>本論文は、19 世紀後期のイギリスの思想家である、エドモンド・ガーニー GURNEY, Edmund (1847-1888) が記した音楽論『音の力』(1880) を詳細に読み解き、そこで展開される多様な視座の中から、形式と表現内容についての議論を軸にして、ガーニーの音楽思想の一端を明らかにすることを目的としている。ガーニーのこの著作は、出版直後では同時代の研究者から音楽美学における優れた業績として高く評価されたが、その一方でガーニー自身は音楽家のためでなく音楽に関心がある人々のために書いている、と表明しているように、専門家ではなく愛好家を対象として、また、ガーニー自身もアマチュアの立場で論じることに終始している。</p> <p>申請者は、500 ページ以上にも及ぶ包括的な著作に対して、上述した「形式」と「表現内容」という二つの軸を設定して、第Ⅰ部で音楽の構造要素と「形式」に関する議論、第Ⅱ部で音楽の表現性に関する議論を扱っている。第Ⅰ部では、音楽の知覚の役割が論じられ、旋律の諸音が一貫性を持ったプロセスを形成する場合に、諸音の継起が一種の「動き」として知覚され、そこに「旋律形式」としての Ideal Motion の認識が生ずることを明らかにし、音楽における諸部分が全体との関係の中で重要性をもつことを示した。第Ⅱ部では、音楽の表現性 expressiveness と印象性 impressiveness の二つの観点から表現内容について考察している。「表現性」は音楽の美や価値を決定づける要素ではなく、音楽の本質的効果は聴き手のうちに喚起する、音楽の「印象性」によるとする。印象性がすなわち音楽美であり、その享受が良い旋律すなわち Ideal Motion の認識であることを明らかにした。その結果として、ガーニーの「表現性」は音楽外的な内容の表現を重視する立場と異なったものであり、かつ、全体性を過度に重視する形式観への批判として細部構造の重要性を強調したものである、という二点が明らかとなった。したがってガーニーの論はハンスリックの形式主義とは一線を画し、感情的要素を排除するのではなく重要と考え、それを形式と不可分に結びつけている、という点を明らかにした。</p> <p>今後の展望として、ガーニーの音楽論が 20 世紀および 21 世紀の音楽思想に対して、どのように位置づけられるかの検証が求められよう。</p>
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	教授 戸谷 陽子	
	准教授 小坂 圭太	
	助教 井上 登喜子	
	教授 徳丸 吉彦	